# 学習室

## 古典のことば——消失と変遷——

池原陽斉

「古典のことば」について拙筆を弄すわけだが、そもそも古典文学とはなにか。一般には江戸時代以前に成立した文学作品を指すことばと認識されているだろう。しかし、江戸時代以前という認定はさほど堅牢なものではない。

たとえば、岩波書店が二〇〇一年から二〇一三年にかけて刊行した「新日本古典文学大系明治編」という、冒頭の定義と対立する名の叢書がある。刊行に際してHPに掲載された「編集委員のことば」(http://www.iwanami.co.jp/moreinfo/240201+/top3.html)をみると、「従来あまり顧みられなかった開化期の漢詩文、和歌、歌謡、海外見聞録なども視野に入れて、江戸からの連続面に配慮した」とある。明治の文学を、古典からの地続きとみるというのが命名の意図と考えてよいであろう。

明治が始まった途端に、文学作品の中味が突如変質するわけもなく、納得のいく見解である。仮名垣魯文のように江戸と明治を横断する作家は決して少なくない。また、『八犬伝』のように明治以降も変わらず愛読された作品も数多い。だからこそ逍遙は、『小説神髄』で馬琴を痛罵するわけである。

古典という用語は、作品と読者の時間のへだたりを前提とする。当然のことながら、十一世紀初頭を生きた人にとって『源氏物語』は古典ではなかった。『方丈記』でも『平家物語』でも『おくのほそ道』でも、事情は変わらない。

時代がくだればくだるほど、読者と時間的にへだたった作品は増え、古典作品の分量も増加していく。とすれば、たとえ数十年後に「新日本古典文学大系昭和編」が誕生していたとしても、とくに驚くには値しないということになる。

実際、谷崎や太宰の作品などはすでに注釈つきで刊行されている。この出版動向は、現代の読者が本文だけを提供されても充分に読むことはむずかしい——少なくとも注釈者や出版界などはそう判断している——ことをしめしている。



さて、どうして明治文学のみならず、谷崎や太宰の作品にまで注がつくのか。いろいろ理由はあるだろうが、根元的な問題として、「ことばの意味がわかりにくい」ということを指摘するのは不当であるまい。これは、古典文学全般が抱える問題でもある。いわく「英語よりも読みにくい」。谷崎や太宰も古典の仲間入りをしかけているということだろう。

話を狭義の古典文学に限定すると、傾向はいっそう顕著となる。古典文学には、現代にのこらないことばが多用される。「いとど」、「おはす」、「かがゆ」、「せこ」、「そばそばし」、「とばかり」、「なまめく」、「みゆき」等々……、いくらでも例をあげることができる。

ただ、こういった現代にのこらないことばに関しては、表記の工夫によってある程度、問題が解消される場合もある。たとえば、「いづくにそ、口よりたぐれる物をもて……」(『日本書紀』巻第一)と書いてしまうと、かなり古典に習熟している人でなければ意味を取ることはむずかしい。しかし、「いづくにそ、口より吐(た)れる物をもて……」と表記すれば、「たぐる」という単語が初見であっても、漢字の意味から「ああ、口から吐きだした物でなにかしたのか」と推測することは可能になる。

常用の表記にこだわらなければ、さらに理解の可能性はひろがる。先述の例から選ぶと、「せこ」は『萬葉集』以来、「背子」と表記される。「せこ」は「彼氏」・「夫」の意であるが、この表記から意味を推定することはまず不可能だろう。

実際、「我が背子を大和に遣るとさ夜更けて暁露(あかとき)に我が立ち濡れし」(『萬葉集』巻二・一〇五・大伯皇女)の初句を、ある小説の登場人物が「背中におぶった子ども」と「解釈」していた。誤認だが、漢字に即した「素直」な理解ではある。

意味の把握を優先するなら、「背子」ではなく、「彼氏(せこ)」とでも表記する方がよほどよい。「いとど」や「とばかり」のような副詞の場合、対応する漢字をあてにくいため、この方法はあまり有効でないが。

また、この拙文に目をとおすような人、つまり古典に関心のある人の場合には、上記のようなことばにつまづくことはあまりないという印象がある。というのも、こういった目慣れないことばにゆきあって、意味が分からなければ、古語辞典を引くからである。「weblio古語辞典」のような無料のオンライン古語辞典のサービスも提供されている昨今、「現代語にない古語」は、古典を読むうえでさして難関ではなくなっている。

もちろん、「かひや」(『萬葉集』ではこの下で蛙が泣いている)とか「たがへ」(『枕草子』にみえる子どものセリフ)のように、語義未詳のことばはある。しかしこういった例はさして多くないし、古典を研究するならともかく、古典作品の講読が目的なら、無視しても差しつかえない場合が多い。

むしろ問題なのは、「現代語にも存在するが、古語とは意味が大きく異なっている語」の方である。たとえば、「日記」などは

その最たる例だろう。

当方は古代文学の研究者であるので、講義では平安時代までの作品について話すことが多い。この時代には『蜻蛉日記』、『紫式部日記』、『和泉式部日記』、『更級日記』など、仮名で書かれたいわゆる「女流日記」がいくつもある（「女流日記」という用語にも問題があるが、ここでは割愛する）。女流ではないが、仮名で書かれた日記の嚆矢として『土左日記』も存する。

また、これら仮名文の日記ほど講義で頻繁にとりあげるわけではなく、「日記」という名称でもないが、藤原道長の『御堂関白記』や藤原定家の『明月記』のような、男性官人の手になる漢文日記も平安時代以降、多く書かれている。

これらの日記について、講義で以下のようなことがらを説明すると、受講生からはたいてい同趣の質問が寄せられる。

たとえば、『更級日記』は成立から百数十年後に藤原定家の手で書写され、現存している伝本は、例外なくこの本からの転写本であること。あるいは、貴顕・藤原兼家の妾（しょう）として生きるなかで、『蜻蛉日記』の作者は夫への愛憎や諦観を記すが、その心理描写の妙が『源氏物語』に影響を与えたとおぼしいこと。さらに大きくは、これらの日記作品の自筆本がいずれも現存しておらず、後世の人の書写した本がのこされていること。つまり、平安時代の日記が多く人の手に渡っているという点を説明すると、「どうして日記なのに」という反応が返ってくることがしばしばあるのである。

このような疑問は、現代の日記が、個人的で秘すべきものという性格を持つという感覚から生まれるものとおぼしい。ブログ日記なども増えている現況、この定義は揺れつつあるのかもしれない。しかし、荷風の『断腸亭日乗』のような著名人の述作を別にすれば、「日記は秘すべきもの」という感覚が、まだまだ根強いことはたしかであろう。

しかし、このような感覚は古典作品を考える際の陥穽といってよい。語誌をたどっていくと、「日記」ということばには、現代とは異なる意味がはっきり認められる。詳細に説明するものとして、『国史大辞典』の「日記」の項目を引く（執筆は橋本義彦、「JapanKnowledge Personal」所収版による）。

「日記」の語の初見は、一世紀の後漢の人、王充の著『論衡』にみえるものであるとされるが、その「日記」とは、『春秋』や五経などの孔子の編著を指しているという。以後、中国では日付を伴わない考証・随筆・語録・家集などの類に「日記」「日録」「日鈔」などの名称をつけたものが多く、わが国でも同じような例が少なくない。

「『春秋』や五経などの孔子の編著」、つまりは『論語』や『詩経』を「日記」と呼ぶのが、この語の初見だという。また「考証・随筆・語録・家集（詩文集のこと）」に「日記」という名称がつけられていたという。現在の日記のイメージとは大きく異なるものである。

さらに『国史大辞典』の記述をみていくと、本邦の日記に関する以下のような具体例もあがっている。

・事件の勘問調書の類である。『続日本後紀』承和九年（八四二）七月辛亥条に、いわゆる承和の変に関連し、罪人を窮問してその「日記」を奏したとある記事は、その早い例……。

・報告書ないし注進状の類で、『東南院文書』に収める天喜五年（一〇五七）の東大寺修理所注進の「所々修理日記」など、同種の例が少なくない……。

いずれも『土左日記』以下の仮名日記が書かれた平安時代の例で、この時代の「日記」の意味が、現在とは異なる面を持つことを雄弁に語っている。どうして「日記」が流布したのかという受講生の疑問は、かくして解消されることになる。

ことばの精確な理解は文学作品読解の肝である。そして、ことばの意味は時代によって推移する。一瞥して語義が把握できそうなことばでも、実は充分に理解がとどいていない場合がある。わかった気にならず、辞書を引き、注釈書を参照する。そうすることで、理解はたしかなものとなる。

もっとも、それでもなお首をひねるようなことばもある。そんなことばを、そのことばをふくむ作品の質を追究してみようと思うようになったら――そこにはさらなる学びの道が広がっている。

――いけはら　あきよし・文学部非常勤講師――